マーク・トウェイン文学の魅力

金　谷　良　夫

アメリカ文学の魅力について特に、マーク・トウェイン文学の魅力について考え、アメリカ文学というジャンルに興味をより一層もたれることを望むものである。

さて、アメリカ文学の魅力という茫洋とした言葉があるが、ここでは特に多少なじみのあるトム・ソーヤーやハックルベリ・フィン（通称ハック）といったキャラクターが登場する魅力ある小説を書いたマーク・トウェインという魅力ある作家の代表作である『トム・ソーヤーの冒険』と『ハックルベリ・フィンの冒険』（以下『ハック・フィン』と略記）を中心に考えたい。

アメリカのノーベル文学賞受賞作家のアーネスト・ヘミングウェイが『アフリカの緑の丘』において１９３５年に、「あらゆる現代のアメリカ文学は『ハック・フィン』というマーク・トウェインの一冊の本に由来する。・・・・・アメリカにある最良の本である。すべてのアメリカの文学作品はそれに由来する。以前は何もなかった。以来それに匹敵するものはない」というように、『ハック・フィン』という小説の出現によってアメリカ独自の文学が確立したと言ってよいだろう。なぜかと言えば、アメリカの思想家であるラルフ・ウォルドー・エマーソンは当時のヨーロッパの影響力はアメリカ東海岸を超えるまで及び、アメリカはその向こうから始まると述べているからである。したがって東部の作家たち、ハーマン・メルビル、ナサニエル・ホーソン、ヘンリー・ジェイムズあるいはエドガー・アラン・ポウらの文学の基準はイギリスにあったのである。そこでミズーリ州で生まれたマーク・トウェインが真にアメリカ文学の礎を築いたということができるのである。

地域性のみならず、トウェインはアメリカのテーマ――たとえばアメリカの自然、西部特有の文化、ヨーロッパの伝統や因習に囚われない新しい文学、文明対自然、アメリカ文化の純粋性、自由の探求、アメリカの夢、モラル、ユーモア、笑い、良心、暴力を扱っている。そしてアメリカの中心部にあった方言を含む言葉とその文体（たとえば『ハック・フィン』には多種の方言が使われている）が、

トウェインはそうした言語を駆使できるエクスパートだったのである。トウェインはそれまでなかったような何事にも囚われない若々しい文章を書いたのだ。また、彼のそうしたテーマや文体を通してマーク・トウェインはアメリカ独自の文学伝統を築いたということができる。ちなみに、わが国においても、村上春樹がたとえば『海辺のカフカ』のなかで、「丸太のように寝ていた」という表現を使っている。英語の sleep like a log(死んだように眠る)を直訳して日本語として意図的に新しい表現として使い、新しい日本語表現を作り上げている。トウェイン独自の新しい文学伝統についてさらに言えば、自然の受け止め方に特徴がある。たとえば、欧米では 19 世紀まで文学で自然をテーマとしてほとんど書いていない一方、日本においては詩や俳句など自然を扱うことが伝統である。日本人は自然とともに生きてきた。19 世紀のイギリス人の自然はそれほど厳しくない母なる自然であるが、それに対してトウェインが描くアメリカの自然は途轍もなく激しく、同時にきびしい自然なのである。

トウェインのテーマについてさらに言えばイギリスにおいては、ウイリアム・シェークスピアの劇作、『ハムレット』の中心テーマは人間性だ。マーク・トウェインはシェークスピアを強く意識し、その人間性をよりリアルに、そして普遍的、あるいは言い換えればアメリカ的に描いたと言える。ハック・フィンの客観的に捉える人間性は鋭い。トウェインがたとえば透徹した目をもつハック・フィン(『ハック・フィン』の語り手)を通して描いた人間性の探求が実に見事に描かれており、それは換言すれば「人間への深い愛」を描いたと言うこともでき、それをしてわれわれ読者は心を動かすのだ。

また彼は、新大陸アメリカの若々しい精神と不屈不撓の開拓者精神(フロンティア精神)からアメリカを描いた。その具体例を引けばユーモアを描いたことである。トウェインはユーモアとはアメリカ的であり、その定義によればウィットはイギリス的、エスプリはフランス的だということである。また、アメリカの夢を描いている。トム・ソーヤーもハックルベリ・フィンも『トム・ソーヤーの冒険』の結末で大金を得る。トウェインは『ミシシッピの生活』で述べるように最高の職業としての水先案内になっており、それは正にアメリカの夢の達成だ。

ここで身近なところからマーク・トウェインという作家を見てみよう。日本においてもアメリカにおける場合ほどではないにしても、マーク・トウェインにまつわる施設がいろいろある。アメリカには、たとえばサンフランシスコにマーク・トウェインホテル、ニューヨークにはマーク・トウェイン食堂、マーク・トウェイン高校、セントルイスにはマーク・トウェイン銀行が存在する。ナショナルトム・ソーヤーデーという記念日もある。日本にも、たとえばデイズニーランドに「トム・ソーヤー島」というものがあり、『トム・ソーヤーの冒険』を基にして作ったものであることは言うまでもない。この島へ乗って行くすべがマーク・トウェイン号であり、それは作家の名前に由来するということは言わずもがなである。別の例を引くと筆者の家の近隣にトム・ソーヤーアスレチック・クラブが以前あった。多くの日本人は事実トム・ソーヤーという名前を見たり、聞いたりしている。2010年の夏は、以前テレビで放送していた番組をNHKの衛星放送で『トムソーヤの冒険』を再放送していた。これはアニメ版であって、当時（筆者が大学院にいた時で四半世紀も前のこと）多くの子供たちが見ていたのだ。それだけそのストリーが依然として廃れていないということだと言える。このように日本人にとって、トム・ソーヤーを創造した作家がマーク・トウェインだとわからない人々が最近多いように見受けられることから、ここでマーク・トウェインとはどういう人間なのかを強調したい。続いて、年代順にしたがって簡単に見ていこう。

さて、マーク・トウェインの本名はサミュエル・ラングホーン・クレメンズと言い、おりしもハレー彗星が見られた年、1835年11月30日アメリカミズーリ州の寒村フロリダで生まれた。4歳のときミシシッピ川沿岸の町ハンニバルに移り住み、この町が『トム・ソーヤーの冒険』の舞台になったところである。そして奇しくも再度75年後に彗星が見られた1910年4月21日に没した。2010年がちょうどマーク・トウェイン没後100年ということになり、日本でも10月にアメリカから研究者を呼んで研究会を行った。マーク・トウェインというペンネームがはじめて使われたのは1863年である。

トウェインは12歳になる前に父親に死なれ学校をやめ印刷工になった。昔は学校へ行かず印刷所で文字を習った人が結構いたようである。ついでに言えば、ベンジャミン・フランクリンもそうであったが、こうした二人にはそれ以外に共通するものがある。たとえば、格言をつくったことだ。トウェインは兄の援助を

得て印刷工になり、それから18歳でセントルイスの新聞社で働いたあと、22歳のとき偶々拾った５０ドル紙幣をもとにそれまでの夢だったアマゾン川探検に出ようとミシシッピ川を南下するが、途中蒸気船の船長に出会い、それにかわり、これも同じく少年時代からの夢であった水先案内になる思いを深める。その夢は叶い1859年彼が24歳のとき、正真正銘の水先案内、すなわちパイロットになる。正真正銘とは、水先案内の見習い期間がかなりあるからである。こうした彼の経験は非常に貴重であったのである。それは見習いから正式の水先案内時代に彼はすべての人間性を観察できたと『ミシシッピの生活』という作品で言っているからであり、そうした経験が彼の人生に大きなインパクトを与えたことは明らかである。

マーク・トウェインはアメリカの南北戦争が勃発した1861年、26歳のとき一時参戦している。戦争体験も彼を大きく成長させたと考えられるが、それまでのヒーロー像ではなく人間性本位に立った見方からである。つまり究極的に戦争反対の立場をとり、要は、戦争に直接携わらないごく一部の政治家が市民を煽り、人を殺すのだという考え方を前面に出したのだ。

その年トウェインはネバダ州（当時は準州）へ行き、銀鉱探しといった一攫千金にうつつを抜かすが成功せず、そのかわり、新聞社で職を得、27歳にして初めて自分のペンネームを使って作品を書く。実はこのペンネームは当初別の人が使っていたが、彼はその名前を譲ってもらったというエピソードがある。マークとは「注意せよ」そしてトウェインとは二尋（船用語で訳3.2メートル）である。それはすなわち、水先案内の重要な仕事として船舶が座礁しないように船長の操船を補佐し水路の案内をする意味である。われわれはそのペンネームから、「二つのことに注意しなさい」と読み取ることが可能である。それを端的に言えば、たとえば自分がおどけたり人を笑わせたりして核心を撞くということである。

時は過ぎ、マーク・トウェインがアメリカで有名になったのは30歳のときである。彼は短編「ジム・スマイリーとその跳ね蛙」を書いたとき、アメリカの一部でセンセーションを巻き起こしたと言ってよいだろう。この短編はアメリカのユーモアが色濃く反映された作品で、アメリカには物事を大げさに言うトールテール(ほら話)の伝統の系譜の内容である。トール・テールとは、たとえば英雄ポー

ル・バニアンという樵のアメリカ民話で、バニアンとは伝説上の巨人だ。それは物事をとてつもない法螺で開拓時代の労苦を笑い飛ばすという手法である。とにかくこの「跳ね蛙」が大いに民衆に受け、トウェインは一躍有名になる。ちなみに日本と違い、アメリカで有名になるとこは並み大抵なことではない。それはなぜならアメリカが巨大だからである。その面積では日本の25倍あるからであり、日本人の感覚では信じがたい。

マーク・トウェインは当時としては稀有な存在で世界を叉にかけた人物である。31歳でニューヨーク、ハワイ、32歳でヨーロッパに行く。彼は大西洋を何度も何度も渡っており、世界一周の旅も経験したのである。1870年マーク・トウェインは何度も求婚し35歳でニューヨーク出身のオリビアと結婚するが、西部出身の彼と東部出身の彼女との結婚はある意味でアメリカ東部対西部というテーマを描くアンビバレンス（両面価値）を物語っている。粗野な性格の持ち主が東部のお上品な伝統への憧れが読み取れるからだ。これは人間の普遍的なテーマかもしれない。人は田舎で生まれ育つと都会へ憧れる場合が多い。トウェインたちの結婚生活はニューヨークで始まり、ヨーロッパへ移り、それ以後アメリカ東部に落ち着くことになる。

1876年彼が41歳のとき、『トム・ソーヤーの冒険』、そして1884年にイギリスで、1885年48歳のときアメリカでマーク・トウェインの最高傑作、『ハック・フィン』が出版される。前者はマーク・トウェインの最初の小説で、トウェインの自伝的な部分が中心に描かれていることは明らかである。トウェインは小説を書くとき、自分が生きて触れ合った人々がいなければ小説は書けないと述べているが、登場人物はほとんど現実に存在した人がモデルになっている。その主人公のトム・ソーヤーはアメリカ19世紀初期のミズーリ州の少年として描かれ、舞台もマーク・トウェインが生きた故郷である。その場所へ行くと、当時の様子を垣間見ることはできなくても、ここがマーク・トウェインの故郷だということは実感できる。あの有名な漆喰塗りの白い塀は現存する。この小説がはじめて出版されたときは、アメリカではほとんど気づかれなかった。本小説に関して当時一部の道徳家は悪い本として評価はしなかったが、大衆は少年少女の本として好んで読んだようだし、現在はアメリカ文学のれっきとした古典として確立されているのである。

トウェインが没する1910年ころまでには、『トム・ソーヤーの冒険』はマーク・トウェインの最も売れる本になっていたのである。現在では少なくとも、それは世界で何百種類もの『トム・ソーヤー冒険』版になっており、36言語以上に翻訳されるという息の長いヒットを続けているのである。

また、『トム・ソーヤーの冒険』は少年、少女だけではなく、大人もたとえば、少年時代、少女時代への郷愁、すなわちノスタルジアをあらわす小説として多くの人々が読んでいる。しかし、トウェインが言うように、ある意味ではこの小説を深く読むと大人でないと理解できない要素も否めないのである。

さて、同様にアメリカの代表的な古典として確立されている『ハック・フィン』について、まず気づく興味深いことは本のタイトルだ。それはイギリス版では *The Adventures of Huckleberry Finn* で、アメリカ版はそのタイトルから The がはずれているが、The がないということは続編があるというニュアンスである。また、この小説は出版された当初から、子供の本として適切ではないとして、たとえばマサチュウセッツ州の図書館で禁書扱いにされたが、出版以来125年を経た現在でも物議をかもす本として焚書処分になっている場合もある。この小説のなかには、たとえば社会の底辺に属し、教養のない浮浪児のハックルベリ・フィンが語り手として口語的なお国なまりで教養のない語り方をすることが最大の理由であった。そして、黒人を差別した表現が随所に使われていること、白人の少年と中年の黒人の逃亡奴隷ジムがともにミッシシィピ川を下ることなどが問題になっているのである。最近ではそうした言葉を書き直す方法をとっているネット上の読み物もある。しかし、この小説はアメリカではじめてお国言葉で書かれたものである。15年前の記録でさえ、この小説は50以上の言語に翻訳され2000万部以上売れていたロングセラーとなっていて、現在ではそうした数字がさらに大幅に伸びていることは間違いない。

逆に言えばそうした差別的表現はそれだけ人間の差別問題ということを根深かく物語っていると言わざるを得ないのである。トウェインは社会問題を扱い、社会批判の精神を常に持っており、ハックルベリ・フィンを通してあるがままの当時の社会を描かせている。ハックルベリ・フィンの語り口は実に小気味良く、それだけますます読者は客観的に読めるのである。

『ハック・フィン』は、『トム・ソーヤーの冒険』以上に子供では理解できない要素が多く盛り込まれており、『トム・ソーヤーの冒険』の続編として書かれたものにもかかわらず微妙な問題を多く孕んでいる。たとえばそれは社会学的な記録である。当時の社会をリアルに語っており、微妙なユーモアも子供には理解しづらい。モラルの受け取り方も同様に難しい。たとえばハックが黒人奴隷のジムを助けることは当時社会通念では反したことをすることになるのだが、人間の心情から鑑みれば正しいからである。

『ハック・フィン』を簡単に分けると 3 部分になる。最初の部分ははじめの 11 章で、『トム・ソーヤーの冒険』の続編的要素が強い内容である。セント・ピーターズバーグでの出来事、特にダグラス未亡人の家にハックル・ベリが引き取られ窮屈な文明生活を送り父親のパップ・フィンによって山小屋に監禁されるところだ。二番目は 12 章から 30 章まで通称ハックとジムがミシシッピ川を下るところで、偽の王様と公爵に自分たちの筏をのっとられて旅をする内容である。最後は、31 章から 43 章で、ハックが王様と公爵から逃れ、パイクスビルでトム・ソーヤーが再登場して、ハックとジムに合流する部分である。

小説のなかで最大のハイライトはハックが逃亡奴隷のジムを幇助する罪の意識に、つまり良心に悩むが、最終的に良心（社会通念でできている）に自分の心情が優位をしめ友達としてジムを助ける決心をする（31 章）ところである。このシーンはアメリカの文学のなかで稀に見るドラマチックシーンの一つと言って良いのである。ジムがミスワトソンの奴隷であるからはじめは、ハックは一旦は彼女にジムの居所を教える手紙を書くが、最終的に “All right, then, I’ ll go to hell” —と言って手紙を破くのだ。ここが正に白人と黒人とが真の友人として成熟する瞬間である。当時としては、掟破りだ。だがそれはハックが板ばさみで苦しんだ末の結論である。が社会はそれを認めようとはしなかったのだ。アメリカでは人種差別といえば必ず社会問題に発展するといっても過言ではない。そうした差別問題は、われわれが克服しなければならない普遍的な問題なのだ。だからこそ、われわれはハックの勇気を、そしてひいてはハックの人間に対する愛を学ばなくてはならないのである。しかし、全体を通してみれば、この小説は何といっても面白くもあり、恐ろしくもあり、かつ美しくもあるのである。

時に、マーク・トウェインは、53歳のとき印刷機への投資で莫大な負債を抱える原因をつくることになる。そして59歳のとき借金返済のためオーストラリア、ニュージーランド、モーリシャス、インド、そして南アフリカなどの国々への講演旅行をする。トウェインは正に当時としては老骨に鞭打って力を尽くしたのだ。マーク・トウェインは作家であると同時に講演家でもあったため、収入として講演は大きな役割を果たしていたと言うことができる。その後60歳で長女を亡くし、68歳で最愛の妻に先立たれる。70歳で『人間とは何か』を匿名で出版し彼の厭世思想を表すのである。1906年の12月、すなわち71歳のときから純粋で潔白を表す意味で公の場で白い上下のスーツを着用し始め、世間に対して浄化を訴える。現在アメリカにおいてマーク・トウェインの扮装役者は数多くいるが、この白一色を身につけ葉巻を吸うスタイルでパントマイムなどを演じており、それだけ影響力があるのである。

マーク・トウェインは、生涯人間性を探求したのである。そして彼は74歳数ヶ月の生涯を閉じるまで人間の本性を追及してやまなかったのである。彼曰く「私の本は水だ」、偉い作家の本はワインである——水はみんな飲むと言っているように、マーク・トウェインの本は万人が読める書物である。アメリカ文学を代表するマーク・トウェインの魅力ある文学を大いに味わいたいものである。

付記　拙稿は2010年神奈川大学秋季高校生講座において「アメリカ文学の魅力」と題して話したものを元にしている。